

上海内山書店の結末

内 山 篤

今回内山完造研究会でとりあげた内山完造の雑記四冊は、戦争末期から敗戦後すぐまでの約三年間に主に上海で書かれたものである。この時期完造は自身および内山書店を取り巻く全てが激変するという体験を雑記に記している。

本稿では当時上海最大の日本書店であった上海内山書店がその幕を閉じる過程を、これら四冊の雑記および『花甲録』をもとに概括してみたい。

内山完造は1913年目薬の出張販売員として上海の地を踏む。3年後の1916年京都で恩師牧野虎次牧師の紹介により井上みきを妻とし、共に上海で新居を構える。翌1917年完造が目薬の宣伝販売のために中国各地へ出張しているその留守宅で、妻みきは小さな、ままごとのような書店を開いた。

キリスト教徒である夫婦は毎週教会に通っており、そこで友人たちの求めに応じて聖書や贊美歌などを日本から取り寄せて販売するというのが商売の始まりであった。魏盛里という、北四川路中程の路地の奥、夫婦の住まいの二階からやがて向かい側、その隣へと拡がり、12年後の1929年には北四川路の突き当たり、大通りに面した店へと発展する。店の本を客が自由に手に取って見ることができる、掛け売りをするという、それまで中国の書店に無かった経営をしたことにより、完造夫婦の人柄も相まって、日本人のお客に加え、魯迅、郭沫若、田漢、郁達夫などを始め日本留学経験を持つ中国人客もどんどん増加し、内山書店は日本人と中国人が集まるサロンのようになる。完造も目薬販売員の職を辞め書店業に専念し、敗戦後国民党軍により接収された時には2~3カ所の支店を持つまでになっていた。

さて、敗戦前後の上海内山書店は四冊の雑記にどのように書かれたか。

上海—青島—大連—奉天（瀋陽）—新京（長春）—大連

完造は1944年6月18日から船で満洲へ、青島、大連、奉天（瀋陽）、新京（長春）などの各地で同業書店、出版社の人と会い、現地での日本書の出版、販売状況を把握するとともに実際に注文し、今後の図書出版情報提供を依頼するなど、書店本来の活動にいそしむ。その注文数も千冊とか三千冊とか、当時の内山書店の好調さがみえる。また一方、各地では銀行で、図書館で、出版関係者の住宅などで必ずと言っていいほど漫談をおこなった。

日本の紙型を上海で印刷

満洲をひとまわりした後、大連から日本へ向かうが、東京滞在中に岩波書店、改造社など出版社を訪問し、かねてあたためている今後の構想——日本の紙型（活版印刷で使う紙製の鋳型）を上海で印刷して販売する——について話し合っている。これは、1940年に始まった日本政府による出版統制で改造社、中央公論社が閉鎖、書籍取次会社は日本出版配給株式会社（日配）一社に統合されるという業界の大きな変化に対応する必要からであろう。実際、完造は東京内山書店を経営している弟嘉吉に命じて改造社、中央公論社、学芸書院などの自身の著書を含む出版物の紙型を購入させ、上海で印刷発行している。

「大陸に文化を守る、これが私の最後の働き場所である。これが方法として日本の紙型に因る印刷

物を上海で造って売れるなら売るが……」（1944年7月14日「決心」）

「内山書店が中に立って岩波書店と聯合出版公司との再聯合を行ふて、そして大陸に於ける日文中文の出版をやる。内山書店と岩波書店と聯合出版との共同出資で出版事業を經營すると共に販売もやる。」（上記雑記末尾のメモ）

上海図書有限会社

一方、日本国内の出版統制の波が上海の日本書店を一社に統合するという形で及び、現地書店と日配（この時期には日本出版配給統制会社と改称）との関係がギクシャクし、日本滞在中の完造は頻繁に呼び出されて東京で日配幹部と協議を重ねた末に、同年11月日本書籍を扱う6社の書店を統合した上海図書有限会社が成立し完造は代表取締役の一人となるが、同時に内山書店の名前も独自の営業も消滅する。

蘇州図書館

上海図書有限会社発足により内山書店の看板が無くなることを見越してであろうか、日本の紙型を使って上海で印刷出版するほか、「戦後の世界に日本文化を大陸に存する事は未だ考へられて居らん事である。蘇州の図書館は先づ内山個人の書物と店員全部のものを買ひ取って、又他の人々からも買ひ取つて小規模の図書館を開らき、内山夫婦は蘇州図書館に住む事。」（同7月14日）という戦後の希望をも記している。

敗戦一年前（1944年7月）の雑記に「戦後の世界に」と書いたその心境を推察するに、直接のきっかけは書店の統合で内山書店としての独自の営業が出来なくなったことだが、その背景としては、ヨーロッパにおける連合軍によるノルマンディー上陸、上海も空襲に遭い在留日本人の浮き足立つ姿、満洲を経て日本への旅行中の体験などにより、日本の敗戦を予感していたことが考えられる。

また「蘇州の図書館」という言葉が唐突に現れるが、なぜ蘇州か、なぜ図書館かは記述がないものの、自分たち夫婦は戦後も中国にとどまり、図書を媒介とした文化の伝播に力を尽くすことが進むべき道であると考えていたのではないか。

内山みきの死

1945年1月13日最愛の妻みきが病死する。1916年京都で結婚して三十年、かたや心の通い合う夫婦であり続け、かたや内山書店を開き、守り、育てる、常にその要の役を果たしていた妻を失った。その時の心情を「……敢然として稼ぐや内山書店を創立して孤軍奮闘独力、今日に至らしむ。……あ、ゆきぬ吾妻のみきは」（雑記一日付なし）と吐露しており、3月8日まで約二ヶ月間記述がないのは喪失感の大きさを表している。

敗戦後みきの墓参りに行くが、入り口で断られた46年9月13日「老ひの縁言」には、「……君が昇天してから後の私のすること為す事は、実は事毎に失敗して居る。それを思ふと又、君によって援けられて居った私がありありと見へるのである。」と、活動ままならぬ我が身の淋しさを表現している。

一方（帰国後の49～50年に書かれた）『花甲録』1945年の項は「妻が私に与えた三十年の真心は、必ず私に遺って居るのである。……私の余生は此処から歩み出さねばならない。」と、整理された書き方になっている。

内山書店の最後

上海では1945年8月11日に日本の無条件降伏が伝えられた。内山書店は国民政府により閉鎖、接収されることになるが、この間の動きを『花甲録』の記述と合わせてみよう。

『花甲録』には「私はいさか期する処があったので、内山書店の出資社員に対して買入れてあった紙を送った。……同時に上海図書有限公司の株主に対しても全部出資額を返還して、さらに日本人と中国人の店員全部に対して、店の全財産と負債とがこれだけある、この中洋紙百五十連だけは魯迅夫人に上げて呉れ、その他の物は全部君達で分けて取って呉れ、僕は何一つ也要らないからと申渡したところ

が、此には皆なが驚いた。」ところがこれでは済まず、中国側から「私の店も上海図書会社もともに改めて一人四百五十万元の解散費の請求を受けた」が「塚本君と青山君とが引受けたので満足な解決を見ることが出来た。」さらに「終戦とともに上海の日本人商店は全部閉鎖されたが、内山書店だけは十月二十三日正式の接收者が来るまで各店共営業を継続した。接收の封印をされるとともに内山書店互助会と云うものを組織して、露店やブローカーを日本人店員が聯合して活動したので、全く不自由なく生活をつづけることが出来た。」と記している。

一方雑記には、10月23日国民政府軍事委員会調査統計局（軍統）により内山書店の接收として二日がかりで全ての商品が持ち去られ、内山書店の全ての店が封印されて、翌24日、25日と相次いで葉溯中、王豊毅ら（正中書局）および国民党中央執行委員会調査統計局（中統）からも接收にくるが、「既に封印され又全部商品は持ち去られたことを通じたのでそのまま帰った。」とあり、さらに「内山学用品部は既に振華書局なる看板が貼ってある。近く内山書店は正中書局となるであらう。此れで三十三年の歴史ある内山書店の最後である。」（45年10月27日）と書かれている。

興味深いのは、内山書店の接收に国民政府の「軍統」と国民党の「中統」の両方が先を争うように来たことである。

嘆願書二通

雑記には1945年12月1日に提出した「嘆願書」（王光漢日僑管理処長あて）の原稿が記されている。「私は謹んで嘆願いたします。」との書き出しの2,200余字におよぶ長文の嘆願書では、1913年に目薬の出張販売員として初めて上海の地を踏んだこと、長江を中心とし11省にわたる出張を重ねたこと、妻みきが北四川路魏盛里の中に内山書店を開設、キリスト教の人を信じるという経営で中日両国の来客に接し、多くの中日文化人に支持されたこと、自身は「中日の了解、特に日本人をして中国並中国々民性を了解せしめんものと、口と筆とによって」講演、放送、『上海漫語』などの著作に努力したことなどを挙げ、今後なお中国の紹介、中国文学の翻訳などに努力したいと述べ、「出来るならば目下接收中に在る施高塔路十一号十五号の二つの店の中の一つを私にお還し頂いて……私の三十年の経験と私の最後の念願とを働きかけて頂き度いと思ふのであります。」と締めくくる。

二通目の嘆願書は12月29日に中央宣伝部対日文化工作委員会羅克典委員あてに出されている。

この嘆願書では、正中書局により接收中の日本書籍のうち、接收者において一部分不要のもの、「日本軍国主義時代の反平和的の物」は処分に困るだろうから、新しく出発する「（仮名）文化書局」に残して欲しい、これらの不要な書籍を廃紙として再生すれば出版用紙の補給にもなり、この嘆願が聞き入れられるなら完造自身の生活費ともなることを述べて、前の嘆願書の店舗返還依頼と併せて速やかな決定を依頼している。

この二通の嘆願書の宛名が異なるのは、日本の敗戦と同時に南京の汪兆銘政府が崩壊し重慶から戻った蒋介石政権による組織機構の整理がおこなわれており、日僑管理処など対日関係も管轄が変更になつたためではないだろうか。これらの嘆願書に対する当局からの反応は、少なくとも今回取り上げた四冊の雑記には見当たらない。

吾人上海に残留者の規則

1946年7月11日付け大公報の記事に、7月15日から外僑の居留証を発行し一ヵ月で人事登記を完成するとの報道があった。居留証の発給条件を列記している。

「此れで大体吾々の残留規則が発布されたのである。特に日僑と指定して居らん処が甚だ含蓄がある。これからボツボツと商売でも始めることにする。」

第二代内山書店へ

上記大公報の記事をもとに「いよいよ第二代の内山書店を始めるべく古本の買ひ集めからやる。」（1946年10月3日）

と、手始めに知り合いの人から数冊の本を仕入れている。

以上、今回取り上げた内山完造の上海時代に書かれた四冊の雑記と『花甲録』から上海内山書店の最後に關わる記述をざっと見てきた。これらを読んで痛切に感じるのは、完造がいかに切実に上海での活動を続けたいと熱望していたか、日本人と中国人の相互理解、文化交流を推し進める役割を自らの使命と考えていたか、ということである。完造は1947年12月6日に上海残留の望みを果たすことなく日本へ強制的に送還された。しかし日本と中国の橋渡しをしたいという思いは、帰国後すぐに始めた漫談の全国行脚、日中友好協会の設立、中国残留日本人の帰国促進などの活動にはっきりと見ることができる。